

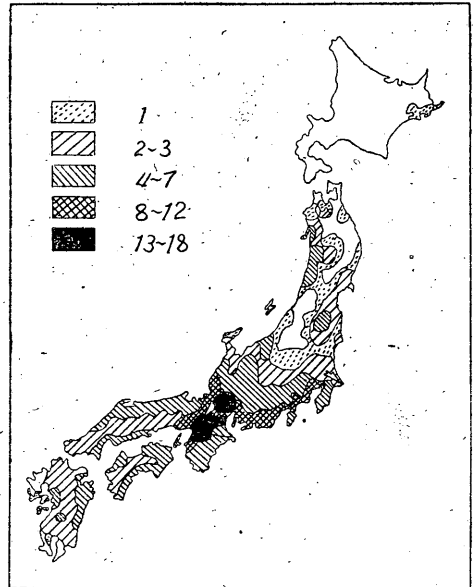
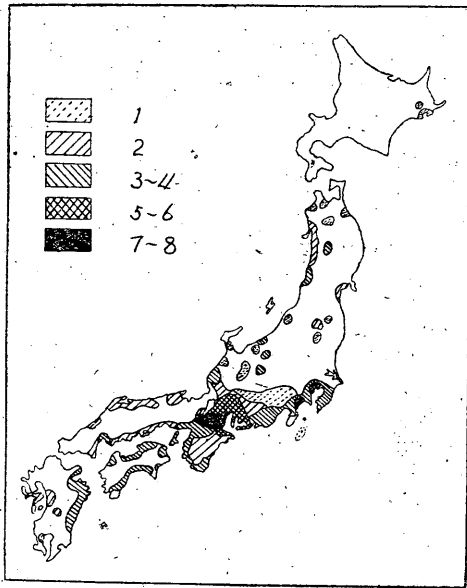
## 烈強震區域と回数

鷺坂清信\* 柴田武男\*

本邦有史以來（天武天皇6年，西曆679年以後）のものについて，烈震及び強震以上の各について，これをうけた地域とその回数につき調査を行つた。第1圖は烈震，第2圖は強震以上をうけた範圍とその回数を示す。

第1圖

第2圖



先づ烈震についてみると，琵琶湖の周邊から伊勢海の西海岸にかける地域及び小田原付近が多くなつている。これに次いで關西では前記地域の外接地域に多くこの範圍は岐阜・名古屋を含めて，渥美半島志摩半島付近までのびている。關東では東京周邊が多くなつている。四國周邊，中國地方瀬戸内海沿岸は主として，寶永，安政，昭和などの南海道地震によるものである。この圖の作成には次のような方針をとつた。即ち從來寶永・安政などの大地震の烈震區域が非常に廣範圍にかけられているが，これは最近の南海道大地震の震度分布圖などから推して適當に縮小した。

即ち昭和21年の南海道大地震により，倒壊家屋を生じた範圍は1府21縣にわたつているが，その震度分布圖をみると，烈震區域はその府縣に局部的に散在している點から推測して，寶永や安政

\* 松代地震觀測所

の地震は大きいには違いないが、従來の圖のように全面的に烈震とは考えられない。又歴史の記録上關東諸國(818)、五畿七道(887)とか、その範圍の不明瞭なものはこれを省略した。なほ第1圖に於ては、紀伊半島中部・中部地方南部などの特別に地殻の堅牢な場所或は熊本縣の人吉、長野縣の諏訪、その他異常震域などに於ては圖の回数と多少相違するであらう。

第2圖においては、強震以上をうけた範圍とその回数を示してある。この場合激・烈震もウェイトをつけず1回と数えたものである。これによると近畿地方中部・岐阜周邊が最も多く、此の外接地域東海道及び關東地方南部がこれに次いでいる。北海道の大部分、東北地方の一部、群馬長野兩縣付近・九州の西北部などでは皆無となつてゐる。この圖の作成には三陸大津浪地震(1933)、福島縣東方沖地震(1938)、その他烈震區域がなく強震區域のみの地震はこれを全部省略した。これらは強震としては弱いものか或は極めて局所的な小地震であるため、これを入れると本圖の統一を缺くことになるからである。なお第2圖に於ては周圍に震源を多くもつ所では、その場所が漸く震度5であるのに、回数の極大を生ずることがあるが、これは無意味なものであるから消却した。歴史の記録については、昔は文化の中心が關西にあつたため、關東方面は關西に比べて記録が乏しいと考えられるので、關東では地震の實際の回数よりも少くなつてゐるとも推測できる。

最後に本圖の作成に關しては武者金吉氏の貴重な資料に仰ぐ所が多い。記して感謝する次第である。